

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1770101531		
法人名	特定非営利活動法人菜の花		
事業所名	グループホーム菜の花・金沢		
所在地	金沢市北塚町西446番地		
自己評価作成日	令和5年 2月 10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社寺井潔ソーシャルワーカー事務所
所在地	石川県金沢市有松2丁目4番32号
訪問調査日	令和5年3月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

① 新職員3名を採用した。前管理者と現管理者の引継ぎに十分な時間をかけたが、管理者双方の力量不足が目立った。年度内の大半は、代表者が朝のミーティングを仕切っていた。
 全職員は「1週間の予定」「1ヶ月の予定」をしっかりと把握し、「往診時の主治医の発言」「薬剤師が行う居宅療養管理指導時の相談内容」「重点的なケアを必要とする人の把握」「病状が不安定な人への気配りすべきケアの把握」等は良く理解し、実践している。
 ② 新職員3名が菜の花に入職して感銘を受けた最大利点は、住環境と自然溢れる庭であった。又、旬のものを食材として楽しむ姿勢や、美味しく食材を調理する工夫に、前施設との大きな違いを感じると同時に、入居者さんの体調不良が少ない原因が、食生活の充実にあるのではないかと、思い至ったようだ。
 ★ ①②は代表者が記入した。(平均年齢 88.2 歳 / 要介護 1.8)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

町会のゴミ当番や回覧板を回したり、グループホーム便りが出来た時には、近隣、町会長、民生委員に配布している。コロナのため、以前の様には交流はできなくなっているが、建物周囲へは散歩に出かけて、近所の方とあいさつを交わしたり、近くの神社へお参りに出かけている。今お花見に出かける計画をしているところである。また、事業所の行事として行っているフラワーアレンジメント教室や朗読の会には外部の先生が来てくれている。
 普段の食事から、無添加にこだわり、だしを丁寧ひいて、美味しいご飯を提供している。骨付きの魚なども提供している。月2回の行事食や保存食づくり、ラッキョウづけやおはぎづくり、ハロウィン、クリスマス、忘年会と食事を楽しんでもらえるよう、利用者もできる範囲で下ごしらえ、盛り付け等を手伝っておこなっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～59で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
60	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	67	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
61	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,42)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	68	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
62	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:42)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
63	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:40,41)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
64	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:53)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	71	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
65	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	72	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
66	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	小規模施設が得意とする濃やかな個別ケアの実践に努めていて、「うちのばあちゃんだったら、どうする？」を合言葉に、新職員3名の教育に力を入れつつ、管理者・全職員が心を一つにして努力した。	パンフレットには「年老いて、病んでも、街なかで、普段通り暮らしませんか！」と理念が記載されている。「うちのばあちゃんやったらどうする」を行動指針としてケアしている。パンフレットの説明が理念の説明そのものとなっている。管理者は週頭の朝礼時には理念について職員に話している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	町会ゴミ当番に参加し、道で出会う近所の方や通学中の小学生への挨拶等を行っている。2F事務所の猫が家出した折に、下校中の小学生が知らせに来たり、朝、散歩する柴犬のコテツに、挨拶を繰り返す入居者さんもいた。	町会のゴミ当番や回覧板を回したり、グループホーム便りが出来た時には、近隣、町会長、民生委員に配布している。コロナのため、以前の様には交流はできなくなっているが、建物周囲へは散歩に出かけて、近所の方とあいさつを交わしたり、近くの神社へお参りに出かけている。今お花見に出かける計画をしているところである。また、事業所の行事として行っているフラワーアレンジメント教室や朗読の会には外部の先生が来てくれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	散歩や外出時に会った地域の方々と、挨拶や会話を繰り返したり、近所にGH便りをお届けしたり、近所のケーキ屋を利用しているが、積極的な地域貢献と言える程のものではない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回議題を決めて、真摯に取り組んだ。議事録に替えた運推が1回あり、コロナの感染拡大時期を避けて、実施した。	家族、金沢市、地域包括、後見人等がメンバーとなっている。今年度は一度だけ書面による開催で、残り5回は対面で開催している。会議では職員教育、水害対策、高齢者に相応しい食事、住環境整備、コロナ感染対策について、医療面でのサポート、経営状況について等が報告、討議されて参加者から助言を受けている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	GH便りを金沢市介護保険課に送付し、又、疑問や質問等があれば、市担当者にFAXで問い合わせしている。	コロナ以降対面での話し合いは特になく、不明な点があればその都度電話やファックスなどで問い合わせたり、利用者の更新申請の手続きを行っている。今年度は、コロナの発生があり、介護保険課に報告している。生活保護を受けている方が入居してきたので、生活支援課のワーカーとの連絡も取っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に全職員に身体的拘束防止マニュアルを回覧し、幹部職員は3ヶ月に1回、身体的拘束等適正化委員会で拘束の是非を話し合い、身体的拘束をしなくてよいケアへの努力を重ねている。	身体拘束適正化マニュアルがあり、8月と2月に指針の周知と事例を挙げて研修を実施している。3か月に一度身体拘束適正化委員会を開催して身体拘束をしないケアに取り組んでいる。また、虐待防止に係る検討委員会も開催している。建物の施錠は夜勤帯に防犯上の観点で実施。転倒防止のためにセンサーマットを利用している人は2名いるが、解除に向けての検討を継続的にしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	全職員は、虐待がいけないことを正しく理解しているが、職員は気付かない内に、正論を吐いて結果として認知症の高齢者を追いやっていくところがある。虐待とは利用者を叩いたりすることだけではなく、言葉による正論も虐待だと考える。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度利用の利用者が2人いることもあり、成年後見制度のパンフレットを回覧し、職員の知識取得に努めているが、制度が煩雑なこともあり、職員の理解度は殆どない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時、当GHの料金体系・運営方針・介護への取り組み等の十分な説明を行い、必要な時は、請求書に「お知らせ」を同封する等の努力をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎年の運推会議で、代表者自ら、経営状況・運営方針等を説明し、家族の要望を聞く機会を設けている。職員は利用者には、毎月月初めに、したいこと等の希望調査を行い、職員は家族には、毎月のシーツ交換時、要望の有無を聞いている。	苦情処理マニュアルがあり、苦情があった時は報告書を作成してスタッフ間で話し合い、再発防止策を検討し改善につなぐことになっている。苦情の体制はパンフレットや重要事項説明書で周知されているが特に苦情は寄せられていない。毎月家族によるシーツ交換の日があり、その時に職員はゆっくり会話をしている時間をとっているため、家族意見や要望を聴取している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	コロナ感染予防の観点から、NPO法人菜の花グループのGH管理者会議は開催出来なかったが、現場は朝夕のミーティングの充実を図っていて、現場の意見や提案の内、取り入れる必要のあるものは、運営に反映させている。	管理者は朝礼やカンファレンス、日々の業務の中で職員と常に話し合い、職員の意見や提案に耳を傾けている。代表者も法人本部が同一敷地内にあるため、いつでも職員意見を直接に聴取したり、管理者を通じて意見や提案を受けて運営に反映させるよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準は高く、代表者は残業しない仕事のやり方を強く指導し、定時帰宅を求めているが、常勤3名の新職員は業務に慣れないこともあり、帰宅がやや遅い。代表者は本人の努力に対して正しく評価をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	GHの業務は多岐に亘り、1人の職員が、介護・栄養士・看護師・事務員・相談員・清掃員等を兼務する。このような多岐の業務をこなすことは、職員のストレスを生む。3人の新職員が入職した。とてもよく頑張ったが、今一步の努力が必要。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ感染予防の観点から、代表者は他GHの経営者等と電話での情報交換を行ったが、職員間の相互訪問等は出来なかった。コロナが静まれば、法人系列のGH職員交流をしたい。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居当初は全職員1人2声運動を実施する等して、利用者が不安に思っていることや、困っていること等に耳を傾け、信頼関係作りに最大限努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には入居後数日間に渡り、利用者の様子を電話で知らせたり、入居者特集号を郵送したりして不安感解消に努め、利用者・家族双方が、安心出来る関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	この問いはGHの理想の姿であるが、「他のサービス利用も含めた対応」まではしていない。ただGHよりも療養型が相応しいケースや、在宅のままの方が相応しいと判断した時は、そのようにアドバイスしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	当GHでは、漬け物・梅干し・らっきょう・カタハ等を漬けるが、若い職員は何も知らず、利用者に笑われながら指導を受けている。ギブ&テイクの良い関係である。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染予防の観点から、シーツ交換の是非を検討したが、毎月、家族に来所を求め、シーツ交換を継続した。そして、利用者の精神的安定の為に、面会禁止を極力避けた。コロナリスクと利用者の笑顔の間で、代表者と管理者は悩んだ。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ感染予防の観点から、家族の面会が手一杯であり、利用者の馴染みの友人を招き入れるような状況ではなかった。ただ、馴染の人に頻繁な手紙を書く利用者への支援や、暫く疎遠になっていた利用者の娘さんとの面会実現への支援を行った。	法人の方針としてできるだけ対面での面会ができるように配慮している。感染拡大時のみ一時的に面会制限を行ったが、それ以外は玄関での面会を継続している。以前のような外出はまだできないが、その代わりにできるだけいろんなところにドライブに出かけ、利用者の家まで行くこともある。遠方の親族の面会も感染対策をとって行っている。友人が手紙をくれたり、お花を届けてくれることもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者1人ひとりの生活歴や性格を把握し、得意なことを活かしながら、利用者同士が共に支え合い、関わりが持てるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	「退居者特集号」を作り家族に送付し、転出先の施設等へ、ケアマネが安否確認の電話をしている。又、長年GHIに在籍され、その後、転出先の施設で死亡されたような場合は、法人からお悔やみのお花等も送っている。十分過ぎる程のフォローをしていると思う。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	毎月のアンケートで1人1人の希望を聞き、実行出来るよう努力している。意思疎通の難しい人には職員が身振り手振りで伝えているが、本人の意向を把握出来ているとは言えない。しかし、穏やかな表情なので、満足されているように思う。	なかなか言葉が出てこない利用者には、よく表情を観察して、例えば怪訝な顔をした時には何か不快なことを感じているのではないかと仕草を見ながら利用者の雰囲気注意到意している。月に一度、利用者のしたい事、食べたいもの等意向調査をして、出来るだけその人の希望に沿ったケアができるよう配慮している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者の入居前の生活をケアプランに表記し、全職員が把握している。そして、無理に過去の生活歴を聞こうとせず、現在の姿をありのまま、受け止めようとしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は、1人ひとりの一日のスケジュール、心身状態、有する力の把握に努めている。朝夕の申し送り時に、注意すべきことがあった時は、必ず伝達しているが、新職員を中心とした伝達体制が確立したとは言い兼ねる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者・家族の希望を伺い、職員で話し合っ て、ケアプランを立案している。また毎月ケアの 目標を定め、月末には担当職員でモニタリング を行い、翌月に反映させているが、来年度から は2ヶ月に一度のモニタリングで良いように思 う。	全員で利用者を見ていこうという方針であるの で、アセスメントも全員で行いケアマネジャーと一 緒にケアプランを作成している。モニタリングは毎 月行い、毎月の課題とモニタリングを記録してい る。大きな変化がなかったとしても、ケアプランは 12カ月で更新している。記録は個人日報(ケース 記録)とバイタル等、往診記録の他全体日報にも 個人の記録がある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を 個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら 実践や介護計画の見直しに活かしている	個人日報を見直し、より健康管理がスムーズ に出来るよう「健康管理表」を作成している。そ して、表に基づき、日々の健康状態を詳しく確 認している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズ に対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟 な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の事情に応じて医療機関の受診代行、自 宅への送迎、シーツ交換時の洗濯代行サービ ス提供等、必要に応じて柔軟に取り組んでい る。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握 し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな 暮らしを楽しむことができるよう支援している	近所の神社に参拝したり、地域に溶け込む努 力をしているが、コロナ禍の為に思う様なこと は出来なかった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得 が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きな がら、適切な医療を受けられるように支援している	1年に1回、家族に主治医往診に立ち会って頂 き、主治医より診療内容について直接説明を 受けて頂いた。又、令和4年度の薬剤師との面 談希望者はなかったが、令和5年度は令和4年 度に入居された方を中心に実施予定。	利用者の主治医は往診対応してくれており、往 診時には職員が付き添うので医師と直接に近況 を伝えたり、指示を受けている。また、24時間オン コール体制をとってくれるので職員、利用者の安 心度は大きい。眼科、歯科も往診してくれる。整 形等の受診の場合には主治医が紹介状を書い て、家族による通院となるが、家族が遠方である 場合などには職員が対応する。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気 づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝え て相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を 受けられるように支援している	以前の「訪看こすもす」と異なり、水ロクリニッ ク訪看を使う時には、訪看に対応出来るよう、 職員の医学的なレベルを上げねばならない。 看護職と協働するには、菜の花側職員のレベ ルアップが早急に必要。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、 又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係 者との情報交換や相談に努めている。あるいは、 そうした場合に備えて病院関係者との関係づくり を行っている。	入院時は介護記録を医療機関に送付してい る。又、家族と連絡を取り合い、利用者の状態 を相談したり、医療機関の相談員や当GH主治 医と連絡を取り、早期退院に努めるマニュアル はある。本年度は該当者はいなかった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今まで何例かの看取りの経験はあるが、本年度は該当者がいなかった。今までの看取りから、職員は多くのことを学んだ。そして学んだことを、自分の人生に取り入れたいと願っている。	食事はみじん切りやおかゆ等食事の形態に注意して対応しているが経口での摂取が難しくなってきたときには次の施設への移行について家族と話し合う。施設の情報提供、紹介、申込などの支援を行いスムーズに移行できるよう支援している。今年度は看取り事例はないが、昨年度を含めて過去には看取りの事例がある。看取りの際には、家族と話し合い、医師から説明を受け、訪問看護等を活用し、事業所としてできること・できないことを説明して取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	全職員は繰り返し、緊急マニュアルを基に訓練を行っていて、又、ほぼ全職員が救急救命訓練を受講済だが、非常時、職員がマニュアルを基に、咄嗟の判断を加えて動けるか？とすると、難しい。介護職員の欠点は、総合的判断力の欠如である。		
35	(13)	○緊急時等の対応 けが、転倒、窒息、意識不明、行方不明等の緊急事態に対応する体制が整備されている	当GHには詳細なマニュアルがあるが、新職員3人の頭にしっかり入っているかどうか？時間を見つけて、確認したい。一般的に介護職員は、マニュアル通りにいかない臨機応変な対応は、不得手と思う。	「緊急時等マニュアル」ファイルがありチェックリストで漏れのないように確認できる。職員に研修や職員会議等で周知している。在宅支援診療医の24時間オンコール体制があり、緊急時には相談し指示を仰ぐことができる。離設リスクのある利用者には「無断外出時マニュアル」に写真を貼り緊急時に備えている。	
36	(14)	○バックアップ機関の充実 協力医療機関や介護老人福祉施設等のバックアップ機関との間で、支援体制が確保されている	協力医療機関との連携は十分にある。当GH代表者と、連携施設の老健理事長等との交流はあるが、現場サイドの交流はない。これは非常時を想定したバックアップと考えられるので、現場サイドの交流が課題である。	協力医療機関の内科は月2回訪問診療の他、利用者の状態変化の際は夜間を含め24時間オンコール体制で対応可能である。近くのケアハウスは非常災害時等にグループホームの利用者の受け入れをしてもらえることになっている。バックアップ施設の老人保健施設とは理事長同士の交流がある。	
37	(15)	○夜間及び深夜における勤務体制 夜間及び深夜における勤務体制が、緊急時に対応したものとなっている	緊急時、男性職員の方が冷静に対応出来、利用者を運ぶ等の力仕事得意だと考え、夜勤には男性職員を多く採用している。又、近隣に住む職員がすぐに駆けつけられるような連絡網も完備している。	夜間はユニットごとに夜勤者が1名。「緊急時情報シート(既往歴や薬剤情報、緊急連絡先等)」、「救急車対応マニュアル」等が整備されており、夜勤者は万が一に備えてそれらを籠にまとめユニットに持って行っている。協力医療機関は24時間オンコール体制であり薬局も夜間対応が可能である。応援体制もできている。	
38	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	GH内の出火場所を、離れた2箇所の場所に想定し、火災訓練マニュアルを根本的に見直したり、避難ルートを変更したりした。職員は頭で分かっているが身体が動かないらしく、再訓練が必要。新職員3人も、身体に入ったとは言えない。	令和4年度は6月28日と9月18日に運営推進会議で利用者と職員と参加者で避難訓練を行ったことを「避難訓練計画書等ファイル」で確認した。避難経路も変えて実施している。定期的な設備点検は業者が行っており、非常用食料・備品等も準備されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39	(17)	○災害対策 災害時の利用者の安全確保のための体制が整備されている	非常時にはボタン1つで、代表者・管理者・法人内関連GHに携帯電話が繋がるようセット済。大水害を想定し、ケアハウスあいびすに避難出来るよう、法人間の話し合い完了済。3GHの管理者は、災害等の緊急時に備えて、3GHに勤務する全職員連絡先を把握している。	「火災発生時マニュアル」「水害・地震・津波等の災害マニュアル」が作成され研修等で周知を行い、定期的に見直しを行っている。「非常用備品一覧」により食料、飲料水、タオル、薬等備蓄され定期的な見直しも行われている。食料はローリングストックしている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
40	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員チェックリスト(入居者対応・言葉遣い)で、職員自身が自分の心に問いかけ、利用者の人格やプライバシー尊重に十分な配慮をしている。	プライバシーや尊厳に配慮した声かけを行えるよう職員は会議やモニタリングで確認している。利用者1人ひとりに毎月希望を聞いている。言葉がうまく出ない方にも職員は普段の生活の中からや、身振り手振りから希望を受け止め、かなえるために職員間で話し合い、連携している。	
41		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	献立やお茶の種類のリクエストを求めたり、レクリエーションの選択をご本人に委ねたり、家事も利用者の得意なことをお願いしたり、外出先も利用者の希望を最大限取り入れたりの配慮をしている。		
42		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者個人の生活のペースの尊重に努めているが、夜間入浴や自由な外出等、今の厚労省の人員配置基準と介護保険報酬では、これ以上の支援は難しい一面もある。		
43		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分の化粧水・乳液等を持参頂き、入浴後はお肌の手入れを行っている。上下バランスの取れた服を着用し、ファッションナブルに装ってる。		
44	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は家庭料理そのもの。大和デパート地下等で新鮮で安くで高級な食材を手に入れ、利用者は調理から後片付けまで、職員と一体で行うこともある。時代は座卓から食堂テーブルへ流れていて、数年前から食堂テーブルでの食事に移行した。	普段の食材から、無添加にこだわり、だしを丁寧ひいている。骨付きの魚なども提供している。コロナ感染予防で今は職員のみで買い出しに行っている。月2回の行事食や保存食作りを行う。ラッキョウ漬けやおはぎ作り、ハロウィン、クリスマス、忘年会と食事を楽しんでもらえるよう、利用者もできる範囲で下ごしらえ、盛り付け等を手伝っている。	
45		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	低脂肪・高たんぱくのヘルシーメニューを心掛け、利用者の中には持病の為に、塩分や水分制限をしている利用者もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	年に1回の歯科検診の実施している。コロナ感染予防の為に、毎食後の口腔ケアの徹底と舌ブラシ使用、就寝前の入れ歯洗浄の徹底を図っている。全職員は1人1人の歯磨きチェックや義歯の状態等を、把握している。		
47	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者と職員が少人数であるGHの利点を生かし、職員は利用者の排泄パターンをほぼ把握している。よって、利用者の排泄失敗事例は非常に少ない。	「排泄チェック表」を記録し、便秘の方は薬になるべく頼らず、食事で食物繊維を摂れるよう工夫したり、ワーファリン服用の方以外は納豆を摂るなど工夫している。一人ひとりに合わせた排泄の支援を行い、例えばパッドの大きさが小さくないか等、自立支援に向けて職員間でモニタリング話し合っている。	
48		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	献立に食物繊維を多く取り入れ、歩行運動を継続し、便秘の際には腹部を温かいタオルで温めたり、マッサージを行ったりしている。		
49	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日や時間帯に縛りはあるが、職員の負担と業務の優先順位等を総合的に判断し、入浴回数が多ければ良いと言う考えを捨てた。又、色々な香りの入浴剤や、菖蒲湯・柚子湯等を楽しんでいる？	週に2回季節毎に菖蒲や柚子の変わり湯なども取り入れ、入浴が楽しみになるよう支援している。「モニタリング」ファイルに「夕/朝替替え、夜間トイレ、誘導一覧表」に沿ってひとり一人の時間やこだわり等を職員は把握し、入浴を拒む方には清拭なども行っている。	
50		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間、不眠がちの利用者がいない。安眠に繋げる為に、日中に身体を動かし、趣味の時間を楽しめるよう支援し、夜勤職員はよもやま話からスタートし、心の内を静かに伺うなどの傾聴に努めている。		
51		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎月、薬剤チェックリストで、現場・代表者共、不要な薬剤のチェックを行っている。又、請求書発送時、家族に薬剤情報送付を継続している。トモコ薬局の居宅療養管理指導は有難く、実のある指導を受けている。		
52		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナの為に人込みを避け、頻繁なドライブを繰り返した。楽しみごとのリハビリ(絵手紙・読書・パズル・大人の塗絵・フラワー教室・お経・踊り・ラジオ体操、家庭菜園、朗読教室、音楽療法等)を多く設定し、一人ひとりに合った活動参加を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の希望に基づき、天候と体調に相談し、散歩・お参り・ドライブ等に出かけているが、現在の人員配置基準では、こちら辺が限界。ボランティアに外出支援を頼み、事故等が発生した場合、責任所在に多くの問題が生じると考える。	以前はご本人の希望、ご家族と相談したり協力しての外出や買い物、時には外泊もあったが、コロナ感染予防で中止していた。現在は感染状況をみながら天候により近所の散歩、お参り、中庭でくつろぐための支援をしている。人数制限しながら兼六園やお花などを見に行くドライブも再開している。	
54		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本年度は職員間で利用者のお金の所持について、徹底的に話し合った結果、利用者4人が金銭管理をされている。金銭出納帳は1カ月に1度、家族さんが中心となり、担当者を交え、金額を確認している。		
55		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が、年賀状・暑中見舞い・絵手紙等を家族宛てに書くよう支援し、宛名やコメント等は職員が代筆するなどしている。又、定期的な電話を家族さんにお願ひし、電話の定期便を心待ちにする利用者もいる。		
56	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	菜の花の建物全体が、今風の冷たいデザインではなく、高齢者にとって居心地の良い空間だと自負している。そして畳や障子を多用し、居間からは季節ごとの草花が咲く庭が見渡せる造りになっている。	施設自体が和風の造りで畳も使用されており、バリアフリーで過ごしやすい仕様となっている。玄関先にはベンチが置かれ、ところどころに置かれているソファ等でもゆっくり一人ひとりが過ごせる空間がある。ウッドデッキでは日向ぼっこやお花見など、中庭の木々や花々が季節を楽しむことができるよう工夫されている。	
57		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間(居間・廊下・玄関先)では、所々にソファやベンチを配置し、気の合った利用者同士で思い思いに過ごして頂けるよう工夫している。又、ウッドデッキを日向ぼっこに役立てている。		
58	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	写真や思い出の品・馴染みの品を、家族に持参して頂いているが、これ以上の協力は難しいので、最近では自室に絵手紙や俳句等を飾り、花の季節に本人の写真を撮り、額装して飾っている。	居室は自宅で使っていた筆筒やテレビなどを持ち込んでいる方もある。工作のお好きな方は自分の作品を、家族写真や絵を飾っている方もある。コロナ感染予防で流行時期は休んでいたが、この冬行ったフラワーアレンジメント教室で作った作品を飾っている。	
59		○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体が純和風となっており、畳を使用することで気持ちが和らぐ。トイレは「便所」と分かり易く表示している。全館バリアフリーで、また足腰の悪い人に配慮して柔らかいソファを廃棄し、硬いクッションのベンチにしている。		